『ハリーのしっぽ』

立命館大学文学部 4 回生　西出悠悟

僕がおすすめしたいドラえもんのお話は、『ハリーのしっぽ』です。このお話は単行本 33 巻、大全集 12 巻に収録されています。物語としてはドラえもんには珍しく明治時代が舞台となっており、歴史浪漫を感じさせる内容になっています。以下にドラえもんチャンネルのあらすじを載せています。

パパやママと庭の物置の整理をするドラえもんとのび太。すると、パパのひいおじいさんから代々伝わるという巻物が出てくる。広げてみたところ、ひいおじいさんであるのび吉が天からの災いにまきこまれたが、なんとか生き残ったと書いてあった。さらに、ふたたび天からの災いがやってきた時には、柿の木の下を掘るべしとも書いてあったが、その日が来るまでは決して掘ってはいけないのだという。

何が埋まっているのか、いったいどんな災いがやってくるのか気になって仕方がないのび太。そこでドラえもんは『タイムテレビ』を取り出し、のび吉が庭に何かを埋めた一週間前を見てみることに。すると、のび吉らしき少年が、水を入れた桶に顔をつけて苦しそうにしていたからビックリ！

あわてた二人は、『タイムマシン』で約１００年前のその時代へと向かう。すると、学校で先生から「もうすぐハリーがやってきて、一時的に地上から空気がなくなる」と聞いたのび吉が、息を止める練習をしていたことがわかり…！？

このあらすじは 2021 年の 12 月 11 日に放送されたアニメのものなので、1984 年に初掲載された原作と少し違いがあります。アニメでは巻物を残したのび吉は「パパのひいおじいさん」ですが、原作では「パパのおじいさん」となっています。原作と直近の放送で 37 年も離れているので、いかにドラえもんに歴史があるかを感じます。また原作ではのび太たちが実際に明治時代へ行くのは浮き輪をのび吉に渡す時なので、このあたりも少し違います。

では感想を語っていきたいと思います。ネタバレ注意なので、まだこのお話を知らない方はぜひ本編を先に読んでください！

このお話の魅力を 2 点説明したいと思います。1 点目はドラえもんの世界で明治時代が描かれることです。ドラえもんはタイムマシンを使って何度も過去へ行きますが、明治時代へ行ったのは原作ではこの話だけだったと思います。明治時代に登場する人物は、のび吉、のび吉のママ、学校の先生、のび吉の友だち、などがいます。服装や髪型は昔なのですが、先生はのび太の先生に、友だちはジャイアンとスネ夫に激似なので、まるで明治版ドラえもんです。明治の世界でのび太たちのご先祖様が生き生きと動く姿は見ていて楽しいです。もし

タイムテレビがあったら、自分のご先祖様が何をやっていたかを観察したいと感じました。アニメではのび太たちが明治時代の町で遊ぶシーンも追加されていたらしく、そのシーンも見てみたいです。

2 点目はハレー彗星が登場する場面が印象的な点です。物語の序盤で騒がれていた「ハリー」の正体が後半で「ハレー彗星」だと分かる場面は、大きなコマも相まって圧巻です。このシーンとても美しくて、ドラえもんのコマを栞にしたグッズの中に選ばれていました。普段マンガを読むときは次から次へとコマを読み飛ばすことが多いのですが、じっくり見てみると味わい深いです。また、ご先祖様がのび太たちからもらった浮き輪を子孫のために残したというオチも好きです。巻物まで書かれて保管されていたご先祖様の大事な物が、まさかへなへなになった浮き輪とはのび太のパパも想像つかなかったでしょう。このお話はハレー彗星がきっかけでご先祖様まで巻き込んだ壮大なストーリーでしたが、最後のオチの拍子抜け感がなんともドラえもんらしくて好きです。

ところで、僕がマンガでこのお話を読んでいて気になったことがあります。扉絵ではチューブを持ったのび吉がドラえもんとのび太に相談しているのに対し、本編ではのび太たちとのび吉は実際には会ってすらいないことです。また、よく見てみると若干顔も違ってみえます。このように扉絵と本編で違いが発生するパターンがドラえもんにはたまに見られます。単行本 21 巻に収録の「精霊よびだしうでわ」でも、物語に登場する雪の精の目が扉絵と本編で微妙に異なっているのです。(気になった方はぜひ確認してみてください)この疑問に対する貴重な回答をツイッターで目にしたことがあります。それは藤子スタジオに 1981 年から 1988 年まで在籍され、アシスタントとして活動されていた三谷幸広さんという方のツイートです。先ほど述べた「精霊よびだしうでわ」の雪の精の目の違いを疑問に思ったという内容のツイートにこのように返信しています。

> 何の話か忘れましたが、ひみつ道具の団子を扉で私が 3 個、本編で先輩が 4 個に描いたら、チーフが「団子の数が違うぞ」と指摘し、それを聞いた先生が「扉と内容はまた別物だからそのままでいいよ」とおっしゃった記憶があります。全然関係ないかもしれませんが、そんな事案もあったと参考になれば幸いです

この話は大全集 16 巻に収録されている「お助けだんご」という話で、実際に団子の数が異なっています。つまり F 先生は扉絵と本編を完璧にリンクさせようという気はなく、あくまでもお話のイメージを扉絵のイラストで表現できればいいと思っていたのかもしれません。扉絵を描いた時点では、のび吉がのび太とドラえもんに相談するという展開がありえたのかもしれないですね！脱線しましたが、ドラえもんマニアはこのような細かい点を調べるのが大好きなのでご了承ください。ぜひ、「ハリーのしっぽ」読んでみてください。